

現地支援委員会

ニュースレター

「第14号」

2015年1月28日



from 東北

全国の諸教会の皆様、日頃から祈りと献金によるお支えをありがとうございます。東北は寒い季節を迎え、震災から4回目のクリスマスとお正月を様々な思いの中で過ごしました。被災地では、地区によって復興のスピードが異なっているため様々な格差が生まれ、また放射性物質被害によって数々の分断が起こっています。そのような中で、私たちの教会は試行錯誤しながらも主イエスに従って被災場所に通い、被災された方々や地域との関係を深めています。引き続きお祈りお支えください。今号は、北海道連合の働きや各支援場所でのクリスマスの様子を紹介いたします。

北海道連合の働き

もうすぐ丸4年を数えようとしている東日本大震災は、北海道にも大きな衝撃を与えました。太平洋岸の多くの地域で津波を経験し、函館では一人の方が亡くなりました。しかしそれ以上に、特に東北三県から続々と届く被害の様子に戦慄したことを今でも思い出します。ガソリンも手に入らず身動きがとれない状況が伝わってきた時、真っ先に立ち上がったのが、函館美原教会でした。連合諸教会に呼びかけ、ガソリンを満タンにした携行缶を集めて東北の被災地域に立つ教会に届け、その安否を尋ねました(3/16-18)。その働きをサポートし、今後の展開を考えるために、北海道連合は役員会を中心に「東北関東大地震支援対策室」(以下、「支援対策室」)を立ち上げ、その活動は第二次支援(3/21-22)、第三次支援(4/11-14)と続きました。

その過程で出会った、ある壮年の男性がこんなことを語ってくれました。「消防団に属している息子が避難を呼びかけてくれなければ、自分もまた津波に飲み込まれていた。しかし、避難を呼びかけた息子たちは乗っていた車ごと津波に飲み込まれ帰ってこなかった」。そう語る視線の先に一台の消防車が半ば埋もれた状態で転がっていたこと(写真)を今も忘れることは出来ません。

その後、連合役員会を中心とした臨時組織としての「支援対策室」の活動は終了し、常設委員会として北海道連合内に災害対策委員会を立ち上げ、大槌町での炊き出し活動の支援が始まりました。盛岡教会を中心とする働きに加わり、計4回の炊き出しに参加しました。しかし、北海道から海を渡って駆けつけるには盛岡・大槌は遠く、北海道連合として活動を継続するには困難が伴いました。

そこでその後は、青森の諸教会と共に「青森・岩手チーム」として、野田村仮設住宅訪問活動に参加することになりました。月に1回のお茶会(傾聴・訪問)は、昨年2月の大雪で中止になった1回を除き、この2月に行われる訪問で42回目を数えます。たとえ一人でも、必ず誰かが参加すること、細く長く継続することを大切にしてきました。活動を続けてきたことで仮設住宅の方たちだけでなく、社会福祉協議会の方とも信頼関係を築くことができたように思います。

野田村は比較的早いペースで復興計画が進んでいる地域と聞いています。2015年度中に他の地域に先だって大きな変化が予想されることに伴い、今後の私たちの支援のあり方もいち早く変化を迫られています。そんな中、先日、嬉しい言葉を聞きました。「バプテストさんのお茶会は続けて欲しい」、「(仮設住宅の解消を)一緒に見届けて欲しい」、「村以外のボランティアさんが主催する集まりだったら出席してもいい」。こうした被災者の方の声に励まされています。

全国の諸教会の皆さまのお祈りと支援に支えられながら、私たちは最後の一人の方が仮設住宅を無事に離れるまで見届けたい、さらに仮設住宅を離れた方々にどのように関わっていけば良いのか考えていきたい、これからもそのような思いで関わり続けていきたいと思えます。

(北海道連合災害対策委員会 田代 仁)



がれきに埋もれた消防車



野田村仮設お茶会の様子



野田村の復興住宅

支援場所でのクリスマス

震災から4回目のクリスマス。今回も、皆様のご支援によって準備したクリスマスプレゼントを持って、被災された方々を訪問することができました。各支援場所で讃美歌を歌い、聖書からクリスマスメッセージを分かち合い、いつもよりも深い交わりが与えられたように思います。皆様のお祈りとご支援に、心から感謝いたします!



大槌町安渡仮設クリスマス会



大槌町小籠第7仮設クリスマス会



大槌町小籠第4仮設リース作り



野田村仮設クリスマス会



巨理町宮前仮設クリスマス会



皆様のご支援で準備したプレゼント



緑ヶ丘仮設クリスマス賛美の様子



牡鹿牧浜仮設 皆でトーンチャイム。野菜とシクラメンをお届け



仮設住宅にお届けしたカード



仮設住宅にお届けしたカード